

令和 6 年 6 月 23 日現在

機関番号：34315

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13124

研究課題名（和文）J. R. R. トールキンの中世英語英文学研究と「ファンタジー」創作を巡って

研究課題名（英文）J.R.R. Tolkien's Medieval Studies and Fantasy Culture

研究代表者

岡本 広毅（Okamoto, Hiroki）

立命館大学・文学部・准教授

研究者番号：10778913

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000 円

研究成果の概要（和文）：中世英語英文学研究を生業としたトールキンは現代ファンタジー文学に大きな影響を与えた。彼の研究者と作家両方の側面を有機的に関連付けることで、ファンタジー文化の先導者としてのトールキン像とその広範囲への影響がうかがえた。ファンタジーは西洋中世の歴史や文学伝統に根差した世界であり、歴史的に継承され構築されてきた文化である。本研究では既存の「中世研究」と「中世主義研究」を分けて考えるのではなく、双方向的に影響し補完し合う領域として再考した。それゆえトールキンの研究と創作の意義に加え、現代のファンタジー文化への貢献についても理解が深められた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ファンタジー文化はマンガやゲームといった大衆文化に浸透しているが、研究はまだまだ発展段階にある。ファンタジー文化は単なる空想の世界ではなく、西洋中世の歴史や文学伝統に根差した世界である。こうした見方はあまり共有されていないことから、トールキンの学術的業績や創作の影響を通して具体的な道筋の一例を提示した。また中世の作品が後世の時代に果たした影響と役割を考察する「中世主義研究」が世界規模で進展する中で、国内ではまだまだ研究が進んでいない。日本独自の西洋受容のあり方が注目を集める中、本研究は今後の研究発展のための足掛かりとしたい。

研究成果の概要（英文）：This research has presented an example of a concrete path forward through the influence of J.R.R. Tolkien's academic achievements and creations. Through the lens of his expertise in medieval English studies mainly, Tolkien's creative work became one of the major sources of influence on modern fantasy literature and culture. By integrating both aspects of Tolkien as an academic and a writer, this research then avoids considering the existing "medieval studies" and "medievalism studies" as separate fields, but rather reconsiders them as fields that mutually affect and complement each other. This proves that fantasy culture is not simply a world of fancy, but rather an imaginary world rooted in the history and literary traditions of the Western Middle Ages.

研究分野：中世英語英文学

キーワード：中世英語英文学 中世主義 アーサー王物語 フィロロジール ファンタジー J.R.R. トールキン

## 1. 研究開始当初の背景

ファンタジー文化はマンガやゲームといった大衆文化に浸透しているが、研究はまだまだ発展段階にある。ファンタジーは単なる空想の世界ではなく、西洋中世の歴史や文学伝統に根差した世界であり、また歴史的に継承され構築されてきた文化である。こうした見方はあまり認識されておらず、具体的な道筋を提示する必要性を感じていた。この点で、中世英語英文学研究を生業とした J.R.R. トールキンが現代ファンタジー文学に大きな影響を及ぼし、「学術領域」と「大衆文化」を架橋したパイオニア的存在と考えられる。彼の研究者と作家両方の側面を有機的に関連付けることで、ファンタジー文化の先導者としてのトールキン像とその広範囲への影響がみえてくる。「中世研究」と「中世主義研究」を切り分けて考えるのではなく、互いに影響し補完し合う領域として捉え直す。このように両者のアプローチを融合することによって、西洋と日本、中世と現代といった地理的隔たりや時代区分を越え、大衆文化の根底に流れる歴史的水脈を深く認識することができる。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は以下の二点にある。一つは、トールキンの中世英語英文学に関連する研究を体系的にまとめること、もう一つは彼の学術業績と創作ファンタジーとの関連性を探り、現代のファンタジー文化形成に及ぼした影響と意義を「中世主義研究」の観点から再考することである。概して、研究と創作・ファンタジー文化生成の相関性を探ることを目的とした。なお、本研究は文献学者(フィロロジスト)トールキンの学術業績の再検討や、多様化する中世主義研究の理解も含むこととした。

本研究を遂行するにあたって、まず大きく分けて二つに大別される中世研究へのアプローチとそれらの有用性を明確に把握しておく必要があった。一つは中世のイギリスで書かれたテキストに限定し、言語分析や解釈を行うもの(=中世研究)、もう一つは中世の作品が後世の時代に果たした影響と役割(どのような理由で発掘され、現代を含めそれぞれの時代と関わり合っているか、など)を歴史的に検討するもの(=「中世主義研究」)である。叙事詩やロマンスから成る中世文学は、トールキンの研究の中核を成すばかりか《中つ国》を舞台とする『ホビット』や『指輪物語』などの物語にも存分に活かされ、現代のファンタジー文学を彩る多くの素材を提供している。彼の学術的成果に裏付けられた創作とファンタジー文化との接点を解明すること、すなわち、従来の「中世研究」と「中世主義研究」とを融合させることで大衆文化に流れる歴史的水脈の再認識を目指すことが可能である。

## 3. 研究の方法

(1) トールキンの中世英語・英文学に関する研究と創作との関連性について、とりわけトールキンの「文献学的知見」がファンタジー世界の創造に重要な役割を果たしたことを明らかにすべく、初期に書かれた書評論文や学術研究を整理することから始めた。特に、トールキンが同僚 E. V. Gordon とともに編纂・出版した 14 世紀末に書かれた中英語アーサー王ロマンス『ガウェイン卿と緑の騎士』(*Sir Gawain and the Green Knight*) の校訂本やファンタジー文学論(“On Fairy-stories”)、あるいは古英詩『ベオウルフ』のモンスター擁護論(“The Monsters and Critics”) は彼の学術的スタンスとファンタジー観の両者を示す重要な業績である。語彙集や校訂本などにもトールキンの作品解釈の一端が入り込んでいるため、学術書の序文、脚注、補遺、グロッサリーなどを総合的かつ詳細に検証した。トールキンの伝記作家 Humphrey Carpenter (1977) が “All are glimpses of important things to come” (147) と評したリーズ大学時代の業績は創作にも結び付く重要な契機であった。そのため、リーズ大学ブラザートン図書館所蔵の “Tolkien and Gordon Collection” を調査し、大学雑誌 *The Gryphon* や学科のメンバーによって記された *Northern Venture* といった当時の文献を重視した。同じく、リーズ大学で開催される国際中世学会 International Medieval Conference への参加や、ロンドンの大英図書館、オックスフォード大学ボドリアン図書館での一時資料の調査も含む。また、これらの大学に所属する研究者とも交流し、積極的に知見を広めていった。

(2) トールキンの作品の根底に流れる「フィロロジスト」としてのあり方やそのアプローチは、「中世主義」を介してファンタジー文化の一角を特徴づけている。例えば、モダン・ファンタジーの代表作『ホビット』を執筆していた 1930 年代、一方でトールキンは 14 世紀の英国詩人ジェフリー・チョーサーの言語に関する論文に取り組んでいた。“Chaucer as a Philologist: *The Reeve's Tale*” と題された論考では、チョーサーのファブリオ(滑稽譚・艶笑譚)の一つ『荘園管理人の話』で使用されるイングランド北部の一方言が音声・語彙・文法の観点から実に緻密に分析されている。注目すべきは、彼の言語への知識と関心が『ホビット』におけるトロールの言葉遣いや

キャラクター造形にも寄与している点である。このように彼の文献学的知見は創作に直結し、ひいては現代ファンタジー文化の中で脈々と継承されている。現に、トルキンの『指輪物語』や広大な神話体系の創造は、1974年に生まれたアメリカのボードゲーム『ダンジョンズ&ドラゴンズ』を経由し、RPG (Role Playing Game) をはじめとする大衆文化の中に浸透している。トルキンの「中世研究」は「中世主義」としても受容され多彩な発展を促す推進力となっている。

#### 4. 研究成果

主に、J.R.R. トルキンの中世英語英文学に関する研究業績を整理し、中世主義的傾向を持つファンタジー文化との関連性の一端を明らかにすることができた。トルキンの著作において学術的論考とファンタジー創作領域は対立せず不可分に結びついている。この点で、「ベオウルフ論」や「妖精物語論」はとりわけ中世と現代ファンタジーの橋渡しを担う重要な成果である。本研究で考察した個別の点は以下のとおりである。

(1) 1953年にWilliam Paton Ker 記念講演で発表された『ガウェイン卿と緑の騎士』に関する論考では、中世文学作品を通じたトルキンの「妖精物語論」としての一面が観察された。本論は他の学術著作と比べあまり注意が払われていないが、トルキンの「準創造」と関連した重要な思想が随所に窺えた。とりわけ、主人公ガウェインが直面する試練である誘惑の場面、そしてそのリアルな状況下に潜む「妖精の空気」への着眼は独創的であり、「現実」と「ファンタジー」双方の織り成す文学性・芸術性をトルキンは高く評価した。初版校訂本(1925年)の序文や註釈、現代英語訳(1975年)とその序文(1953年のラジオ放送に基づく)、そして『妖精物語について』なども含め、「J.R.R.トルキンの「ガウェイン論」再考 “the air of ‘faerie’” の効用を巡って」(『中世英語英文学研究の多様性とその展望』(菊池清明・岡本広毅編)所収)において議論した。また、同書では今日の中世英語英文学研究を巡るアプローチを概観したが(『中世英語英文学研究における多様な視点と研究方法』)これは20世紀初頭の英文学研究におけるトルキンの学術的貢献を把握する一助ともなった。

(2) 「ゴグマゴグ討伐とブリテン建国：年代記とロマンスにおける巨人像の変遷」(日本中世英語英文学会シンポジウム)では、巨人表象を通じたブリテン島建国神話形成の一端を考察した。ブリテン島のルーツを巡る建国神話や後のアーサー王伝説との関わりは、トルキンのファンタジーの源泉としても追究されるべき課題である。トルキンが現代英語訳や翻案を残している『頭韻詩アーサーの死』や『ガウェイン卿と緑の騎士』に登場するモンスター像や風景の受容と継承についても検討した。前者は「中世ブリテン建国史と巨人族討伐 『ブルート』年代記とロマンスにおける歴史的記憶」(『「巨人」の場合(トポス) 古代オリエント・ユダヤ・イスラーム・ヨーロッパ文化圏における巨人表象の変遷』 勝又悦子編(同志社大学一神教学際研究センター))、後者は「ガウェイン・カントリーの継承と発展 『忘れられた巨人』への着想源」(『立命館文学』)の中で議論した。

(3) 中英語ロマンス『ガウェイン卿と緑の騎士』の受容過程を、中世主義の系譜の中で検討した。現代のアーサー王物語は、15世紀にトマス・マロリーが著した『アーサー王の死』を主要な源泉としている。初期に印刷された『アーサー王の死』と異なり、『ガウェイン卿と緑の騎士』は19世紀になってようやく日の目をみた。校訂本や翻訳、研究などを通して認知度と評価が高まる一方、本作はマロリーの『アーサー王の死』を基調とする枠組みの中に組み込まれていった。別個に存在したロマンスがこの「マロリー・テンプレート」へと導入される過程は注目されてこなかった。これにより、『ガウェイン卿と緑の騎士』(あるいはガウェインを中心とする関連物語)にも独自の展開や部分的な改変が生まれ、騎士ガウェインのもつ幾分否定的なイメージの払拭や見直しの契機となっていることが明らかとなった。この点は“Sir Gawain and the Green Knight in Malory's Template: 'Finding Time for Romance' in Modern Arthuriana” (POETICA: An International Journal of Linguistic-Literary Studies) において敷衍した。本作の日本における受容経路についてはまだまだ不明な点が多く、例えば国立国会図書館に所蔵されている再話や翻案作品などから詳細にみてゆく必要がある。なお、映画『グリーンナイト』に付随したトークイベントなども含め、トルキン研究者の伊藤尽氏より多くの示唆を得ることができた。

(4) 中世主義の系譜に関連して、18世紀以降のバラッドやロマンスの発掘、ゴシック文学との関係性、そして20世紀のトルキンのファンタジー作品へと至る経路など歴史的な見識を深く掘り下げた。ダラム大学のニール・カートリッジ教授からは中世ロマンス・ジャンルについて、そしてリーズ大学のアラリック・ホール准教授からはトルキン研究に関する専門的な助言を仰いだ。トルキンはリーズ大学で1920年から1926年まで教鞭をとり、学術的および文学的思考を深めていった時期であった。大学のブラザートン図書館に所蔵されている特別コレクション(Tolkien & Gordon Collection)ではトルキンの詩作や手紙などを調査することができた。また、英国ブラッドフォード大学で開催された講演会(ジョン・ガース氏など)、リーズで開催されたトルキン協会主催の研究発表会、リーズ大学で開催されたInternational Medieval Conferenceへの参加を通して、トルキン研究の最新の知見に触れた。オックスフォード大学のボドリアンライブラリーではトルキンの遺稿を調査し、『ガウェイン卿と緑の騎士』とファンタジー創作に関する新たな研究の可能性が広がった。これらの研究成果の一端は、『ユリイカ：詩と批評』に寄稿した翻訳「リーズ大学のJ.R.R. トルキン(アラリック・ホール/岡本広毅訳)」や論考「英雄精神と騎士道——トルキンのベオルフトノスとガウェイン」において

まとめられた。古英語叙事詩『モールドンの戦い』(*The Battle of Maldon*, 10 世紀)と『ガウェイン卿と緑の騎士』に関する論考(前者については題目『ベオルフトヘルムの息子ベオルフトノスの帰還』)はほぼ同時期に出版され深く関連している。『帰還』における“ofermod”や“chivalry”のニュアンスを踏まえ「ガウェイン論」を読むと、両者には共通するモチーフと対照的な英雄的資質が観察される。北方の勇気や貴族の驕り、献身や自己犠牲など奥深い人間性を示すこれらの中世作品の人物は、『ホビット』や『指輪物語』に登場するトーリン、フロド、サム、ボロミアなど様々な種族や人物の造形に活かされている。緻密で独創性に富むトールキンの研究は《中つ国》の世界を彩る創造の過程であった。なお、古英語研究者福田一貴氏との議論を通じてトールキンの古英語語彙に関する理解が深められた。

(5) 中世受容に関する新たな学術的潮流として、「国際中世主義」(International Medievalism)に目を向け、既存の中世主義研究との共通点や相違点を整理した。これは従来の中世主義研究が前提とする西洋的枠組みを超え、より世界規模で、かつ多彩に展開する中世主義のあり様を考察するものである。こうした観点を踏まえ、国立国会図書館での資料調査(RPGを扱った90年代の雑誌など)も進め、日本のファンタジー文化を支える西洋中世主義について理解を深めた。また、ヴァナキュラー文化研究とも接続も模索し、「中世の英語文学とヴァナキュラーとしての歩み」(『立命館言語文化研究』)の中で両者に通底する理論の構築を目指した。とくに大衆文化における中世文学の生成・継承・変容(ヴァナキュラー性)は「国際中世主義」の根幹を成す。この点は、西オーストラリア大学のアンドリュー・リンチ教授にも助言を仰ぎ、西洋におけるアーサー王物語の受容史の知見を日本の文脈に置き換え分析を試みた。Centre for Medieval and Early Modern Studies では“Medievalism and Arthurian Legend in Japan”と題した発表を行い、日本におけるアーサー王物語の受容過程を騎士道・武士道に紐づけて再考した。特に児童向けに書かれた物語や挿絵などで「恥」や「復讐」といった武士道的側面へ引き寄せた解釈が提示されている。日本独自のアーサー王物語受容を扱った論文は今後出版される予定である。また、日本の RPG における中世のイメージやモチーフを探る発表“Japanese Role-Playing Games (JRPG) and Western Medievalism”(マードック大学日本協会主催)では、研究者や学生と有益な意見交換を交わし、改めて中世主義のもつ多様性やそれへの関心の高さを認識した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 2件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 岡本広毅	4. 巻 55
2. 論文標題 英雄精神と 騎士道 ―トールキンへのオルフトノスとガウェイン	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『ユリイカ：詩と批評』	6. 最初と最後の頁 191-204
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 アラリック・ホール（岡本広毅訳）	4. 巻 55
2. 論文標題 リーズ大学のJ.R.R. トールキン	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『ユリイカ：詩と批評』	6. 最初と最後の頁 205-209
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡本広毅、勝又悦子編	4. 巻 なし
2. 論文標題 「中世ブリテン建国史と巨人族討伐 『ブルート』年代記とロマンスにおける歴史的記憶」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『「巨人」の場(トポス) 古代オリエント・ユダヤ・イスラーム・ヨーロッパ文化圏における巨人表象の変遷』	6. 最初と最後の頁 139-164
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡本広毅	4. 巻 97&98
2. 論文標題 "Sir Gawain and the Green Knight in Malory's Template: "Finding Time for Romance" in Modern Arthuriana"	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 POETICA: An International Journal of Linguistic-Literary Studies	6. 最初と最後の頁 55-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡本広毅	4. 巻 683
2. 論文標題 「ガウェイン・カントリーの継承と発展 『忘れられた巨人』への着想源」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『立命館文学』	6. 最初と最後の頁 165-181
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 岡本広毅	4. 巻 33
2. 論文標題 中世の英語文学とヴァナキュラーとしての歩み：チョーサー、地方語、周縁性	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 立命館言語文化研究	6. 最初と最後の頁 65-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 1件／うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Hiroki Okamoto
2. 発表標題 Arthurian Legends and Gawain's Reception in Japan
3. 学会等名 The 2023 Hiroshima International Conference In sondry ages and sondry londes: Global Chaucer in the XXIst Century (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 岡本広毅
2. 発表標題 J.R.R. トールキン のガウェイン像ー “ofermod” と “chivalry” に着目して
3. 学会等名 国際アーサー王学会日本支部2023年度年次大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Hiroki Okamoto
2. 発表標題 Japanese Role-Playing Games (JRPG) and Western Medievalism
3. 学会等名 Murdoch Japan Society (Murdoch University)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Hiroki Okamoto
2. 発表標題 Medievalism and Arthurian Legend in Japan
3. 学会等名 Perth Medieval and Renaissance Group (University of Western Australia)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 岡本広毅
2. 発表標題 「ロマンスの時を求めて」ーマロリー・テンプレートにおけるガウェイン物語の受容
3. 学会等名 日本中世英語英文学会西支部例会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岡本広毅
2. 発表標題 中世ブリテン建国史における巨人族とストーンヘンジ建立 マーリン、記念碑、コロニアルな歴史
3. 学会等名 同志社大学ー神教学際研究センター
4. 発表年 2021年

1．発表者名 岡本広毅
2．発表標題 「ゴグマゴグ討伐とブリテン建国:年代記とロマンスにおける巨人像の変遷」
3．学会等名 日本中世英語英文学会
4．発表年 2020年

1．発表者名 岡本広毅
2．発表標題 「Sir Gawain and the Green Knightを紐解く “Unknotting” Gawain」
3．学会等名 国際アーサー王学会日本支部
4．発表年 2020年

1．発表者名 岡本広毅
2．発表標題 「中世のヴァナキュラー言語としての英語と英語文学の出発」
3．学会等名 立命館大学国際言語文化研究所 リレー講座
4．発表年 2021年

1．発表者名 岡本広毅
2．発表標題 「アーサー王伝説の発展：歴史とファンタジーを巡って」
3．学会等名 説話・伝承学会（招待講演）
4．発表年 2021年



〔図書〕 計3件

1．著者名 菊池清明・岡本広毅編	4．発行年 2020年
2．出版社 春風社	5．総ページ数 505
3．書名 『中世英語英文学研究の多様性とその展望：吉野利弘先生 山内一芳先生 喜寿記念論文集』	

1．著者名 岡本広毅（ウェルズ恵子編）	4．発行年 2022年
2．出版社 丸善出版	5．総ページ数 190
3．書名 『多文化理解のための国際英語文化入門』	

1．著者名 ニール・フィリップ著・岡本広毅訳	4．発行年 2022年
2．出版社 みずき書林	5．総ページ数 167
3．書名 『ガウェイン卿の物語 アーサー王円卓騎士の回想』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------